学苑　第八〇二号　二三～二六（二〇〇七・八）

月と梟と〈私〉と

――「林の底」で起きたこと――

遠藤　祐

はじめに

「林の底」[1]は、ひとまず、「「黄金の鎌」が西の空にかゝって、風もないしづかな晩に」そこを訪れた〈私〉と、「一ぴきのとしよりの梟」とのあいだに、何ごとが起きたかを告げる一人称の物語と読めるのだが、それはどうして「林の底」と題されたのだろう？　〈私〉の語りをたどってみると、そのなかに〈林の底〉という言葉は見当たらないことに、気づく。代わりに〈私〉は、物語で自身のたたずむ場所に関して、「一ぴきのとしよりの梟が、林の中の低い松の枝から、斯う私に話しかけました」と、「その晩は林の中に風がなくて淵のやうにひそまり」と、「梟は少しあわてましたが、ちょっとうしろの林の奥の、くらいところをすかして見てから」と、語っているのである。つまり梟とあい対した空間を〈林の底〉とは認めていないわけで、したがって〈私〉が自身の物語を「林の底」と題するはずはない。すると、誰がこの題をつけたかが問われることになるが、それは〈私〉とおなじ次元にたつ梟ではありえまい。そもそも或る事物の底をはっきりと認めることのできるのは、それを上から見おろした場合ではないか。大きな箱の底にしても、井戸の底にしても、あるいは都会のビルの谷間の底にしても。だから、〈私〉の物語に即していえば、その空間を〈林の底〉とする視点にたつものは、梟と〈私〉のいる林のはるか上、空の高みに位置していなければならない。

そのようにみたとき、「林の底」のいま一人の登場人物、冒頭で「「黄金の鎌」が西の空にかゝって」と〈私〉の触れた三日月の光が、鮮かにわたしの心を照らす。一人称の物語だから、語りは月の視点にたつことがなく、読者もついそれを忘れてしまうのだが、わたしのように題名の意味するところにこだわるものには、空から〈林の底〉を見おろす存在を、軽く見すごすことは、どうしてもできない。なるほどこの月は、たとえば「オツベルと象」の月と違って、梟にも〈私〉にも口で語り掛けることはない。けれども物語のはじめから終わりまでかわることなく、二人に「銀いろの」光を差し伸べている。黙っていても、〈林の底〉の情況の一部始終を見守っているのであって、事のなりゆきに深い関心を寄せている、と思われる。それゆえ、「林の底」とは、梟と〈私〉の物語とみえて、実は月も加わった三者の物語にほかならないことを、〈はじめに〉指摘しておきたい。

1　梟と〈私〉と

「林の底」に登場し、しかもそこに起きたことの語り手となる〈私〉とは、誰なのか。男であるのは確かだし、語り口や梟とのやりとり、対応の姿勢から、老人ではなく、未熟な若者でもなく、人生経験を積み、世間智を備えた壮年の人物という想像はつくけれども、どこに住み何を生業とする人物かは、わからない。それもそのはずで、〈私〉はみずからの語りにおいて、自分の身許に触れる必要などまったく感じていないのだから。事情は、なぜ、なんのために〈林の底〉にいるのか――についてもおなじであって、それは読者の知らなくてよい事がらなのだろう。〈私〉はおだやかな月夜に魅せられて散歩に出掛け、気づいたら〈林の底〉にいて、梟から語り掛けられた、という次第なのかも知れない。もっとも梟とは初対面ではなさそうだ。「ところが私は梟などを、あんまり信用しませんでした」と「私はけれども仲々信用しませんでした」とを前後に置いた語りの次の一節――「ちょっと見ると梟は、いつでも頬をふくらせて、滅多にしゃべらず、たまたま云へば声もどっしりしてますし、眼も話す間ははっきり大きく開いてゐます、又木の陰の青ぐろいところなどで、尤もらしく肥った首をまげたりなんかするとこは、いかにもこゝろもまっすぐらしく、誰も一ぺんは欺されさうです」によって、前からの顔なじみであり、一度は「欺され」た苦い体験をもつらしい、との推察もつく。

とはいえ、「わたしらの先祖やなんか、／鳥がはじめて、天から降って来たときは、／どいつもこいつも、みないち様に白でした」と、梟が〈私〉に向けて語りだすところからはじまる「林の底」で、〈私〉はもっぱらそこにたつ自分がどうしたかに想いを集めて、そのなりゆきを確実に伝える語り手としておのれを位置づけていることを、見逃すべきではあるまい。読者は〈私〉の意図を汲んで、語りに素直についていけばいいのである。

ならば、〈私〉の語る「林の底」のはこびはどうか。まず梟の語り掛けを告げる冒頭の一段がある。読者はそれを、物語の幕開けとも〈発端〉とも呼んでよい。そのあとに物語情況の動きを細かに伝える長い〈展開〉部が続き、それを距てて、〈私〉が梟に別れを告げる幕引きの一段、〈結末〉のそれが、置かれているわけだ。「林の底」の語りの仕組みを支えているのは、登場人物の数とおなじ〈三〉、〈発端〉〈展開〉〈結末〉という昔ながらのヨミがわたしに示すそれにほかならない。三人と三部と――数の一致は偶然ではあるまい。仕組みの細部に眼を凝らせば、なお〈三〉が認められるのだから。〈私〉が〈三〉を意識しつつ語りを進めていることは、〈発端〉と〈結末〉のあいだに対応の関係の見いだせるところにも、明らかだろう。二つの語りが長さ、いや短さにおいてほぼひとしく、[2] どちらにも登場人物のひとりのセリフが先立つ点に、注意したい。さらに、「斯う私に話しかけました」と告げられるはじまりのそれが、梟の「わたしらの先祖やなんか、／鳥がはじめて、天から降って来たときは、／どいつもこいつも、みないち様に白でした」であるのに対して、「斯う言ひながら」とあるおわりのそれが、〈私〉の梟にのこしたセリフ、「さうかねえ、それでよくわかったよ。さうしてみると、おまへなんかはまあ割合に早く染めて貰ってよかったねえ、なかなか細く染まってゐるし」である、という事態もわたしの関心を喚ばずにはおかない。

幕開けのトキと幕引きのトキと、〈林の底〉に聞こえる、「黄金の鎌」の光のもとにある梟の声と、そして「その水銀いろの重い月光」の「中」に

たつ〈私〉の声とは、直接に対応してはいなくとも、月と梟と〈私〉の物語のはこびに即してみれば、はるかに響き合って、「林の底」全体のカタチをきちっと整えている、とみられよう。

そういう「林の底」の在り様は、おなじ作者の〈西域の物語〉のひとつによく似ている。その「雁の童子」もまた、地上の人物、「年老った巡礼」と〈私〉の出会いと訣れとを首尾におき、二人のあいだに何が起きたかを〈私〉が語る、三部から成る一人称の物語にほかならない。「流沙の南の、楊で囲まれた小さな泉」のほとりに老人と〈私〉がともに過ごすのは、「たゞ一時」と長くないが、〈林の底〉で「低い松の枝」にとまる梟と〈私〉とがあい対するトキも、同様に短い。語りはじめに「西のそらに」かかる月は、語りのなかほどでも「西のそらに在り」、〈私〉の語り終わるころにもそこからさして動いていないと、見受けられるのだから。のみならず、「雁の童子」の〈私〉も、「林の底」の〈私〉も、それぞれの物語の第二部で、出会った相手の語りの聴き手となり受け手の立場に身をおく点が、注意されていい。したがって、「雁の童子」と同様に、「林の底」もその内にもうひとつの物語が組み込まれているわけだ。巡礼の老人は、おなじ西域の巡礼である〈私〉に、他の語り部から「聴いた」、故あってしばらく地上に〈人の子〉となった天童子の帰天の物語を、みずからの言葉で語るのだし、年老いた梟は、月夜の散策に出た〈私〉に向かって「名高いとんびの染屋」の話の語り直しを試みるのである。内なる物語はどちらも、その語り手の創作ではない。

にもかかわらず、「林の底」の「雁の童子」との大きな相違も、老人のまた梟の前に在る二人の〈私〉の姿勢のうえに、認められなければならない。その情況について、わたしは以前「雁の童子」を読んだときに、検討を加えたことがあるので[3]、その一節をここにも引いておこう、――「そういう三部構成の第Ⅱ部に、《雁の童子》がすっぽり嵌め込まれて、「雁の童子」は典型的な入れ子構造をとるわけで、語り手〈私〉は第Ⅱ部では聴き手の位置にわが身をおく。といっても、〈私〉が語りのエネルギーを節約したわけではない。老人の語るところは「尊いお物語」と受けとれるゆえに、一字一句おろそかにはできないとの想いが、そこに働いているはずである。語り手がみずからの語りのなかで他者の物語の受け手になる、という構造は、「林の中の低い松の枝」にとまった年寄りの梟から、「とんびの染屋」の話を〈私〉が聞く「林の底」とおなじだが、聴従の姿勢において、受け手としての在り様がまったく異なる」。《雁の童子》は老人の語る物語を指すのだが、なるほど、それが語られるあいだ、ひと言も口を挟まず、ひたすら老人の声に耳を傾ける〈私〉とは違って、「林の底」の〈私〉はいかにもうるさい。それゆえその〈私〉は聴き手ではなく、受け手と呼ばれざるをえないのである。

たしかに「林の底」は、「雁の童子」と似たところを多くもつ。だからこそ二作は比較の対象となり、したがって双方の差異も瞭かにみえてくるわけだ。似ていなければ、誰も読みくらべてみようとはしないだろう。そこで、あらためて二作を眼の前に並べてみると、そもそも、作中に〈語り・聴く〉もしくは〈語り・受ける〉関係が生まれるきっかけに、違いのあることに気づく。「雁の童子」では、「泉のうしろ」の「小さな祠」にまつられた天童子にまつわる物語を、〈私〉が聞かせてほしいと老人に頼むのだが、「林の底」では、〈私〉の顔を見た途端に梟の方が、「わたしらの先祖やなんか」云々と語りだすのである。それでは〈私〉にしても、読者にしても、唐突の感をまぬがれまい。梟はその「とんびの染屋」の話を誰かに

語りたくて、うずうずしていたようだ。なぜそうであったかまではわからない。あるいは自分が博識のえらい存在であることを示したかったのかもしれない。もっとも巡礼の老人も「何か、私に語しかけたくてゐた」というけれども、いきなり口をきく失礼をわきまえて、「寂か」に機の熱するの待つところが、違う。〈私〉が梟の姿勢をいぶかしく思い、いささかの抵抗を覚えたことは、次の「私は梟などを、あんまり信用しませんでした」以下の一節が、示しているだろう。

では〈私〉は、「話しかけ」た梟にどのように対応したか、いかにして受け手となったのか。その次第を直接語りに即いてみてみよう、――「しかし又そんな用のない晩に、銀いろの月光を吸ひながら、そんな大きな梟が、どんなことを云ひ出すか、事によるといまの話のもやうでは名高いとんびの染屋のことを私に聞かせようとしてゐるらしいのでした、そんなはなしをよく辻褄のあふやうに、ぼろを出さないやうに云へるかどうか、ゆっくり聴いてみることも、決して悪くはないと思ひましたから、私はなるべくまじめな顔で云ひました」とあって、冒頭の語りを受けて立つことにした〈私〉のコメントが続くのである。いよいよ梟と〈私〉のかかわりが具体的に動きだすわけだが、それを追うのに先立って、いまの一節になおこだわっておく必要が、わたしにはある。必要のひとつは言い回しの問題で、なかほどの「聞かせようとしてゐるらしいのでした、そんなはなしを」とある個所は、〈……のでしたが、そんな……〉となるべきだろうということ。

いまひとつ見逃せないのは、ほかならぬ〈私〉自身の、梟に対応する姿勢そのものなのだ。いまの一節の伝える在り様は、「ゆっくり聴いてみる」と告げられはするものの、どうみても素直な聴き手の姿勢とは受けとれない。梟の「話のもやうでは名高いとんびの染屋のことを」語ろうとしていると気づいた〈私〉は、はたして相手はそれを「ぼろを出さないやうに云へるかどうか」を試してやろう、と思いつく。すなわち論文審査の面接に立ち会う試験官のつもりで、梟に臨むのである。だから、ひき続く事態の推移のうえで、うるさいのももっともと首肯けるのだ。かくて、そういう受け手の動きに、語り手はいかに反応したか、また二人のやりとりの間に、物語生成のなりゆきはどうなったか――を追うことが、「林の底」を読むものに与えられた次の課題となる。「あの《名高いとんびの染屋》の説話の再話という形式をとりながら、それを語る梟の語り口、それを梟に話させる話者《私》の話の誘い出し方、《私》と梟の心理的かけひき、そして作品全体を成立させている《私》の独特の語り口が、一体となって、単なる再話をこえたあざやかな作品世界をつくり出している」と、全集「解説」(4)に天沢退二郎はいう。適切な指摘であって、そのとおり梟と〈私〉の「語り口」、「話の誘い出し方」、「心理的かけひき」が微妙にからみ合って醸しだす妙味を感得してもらうために、「林の底」は読者の前に在るのだ、と思う。ただわたしは、妙味を醸す要素のひとつに、黙って光を差し伸べる月を加えたいのである。

2　梟の語りと受け手と

登場人物の三人と三部の構成と、「林の底」を支える基数に〈三〉のあることをみてきたが、その浸透度を測るために、第二の〈展開〉部をたどると、そこに三段のはこびを認めることができる。冒頭の語りの続きを梟が口にする前に、面接を受けるものと試験官とのあいだに交わされた問答

を伝える前段と、物語が語り出されてからも、事ある毎に試験官が口を挿んで、物語は中断を余儀なくされる中段と、試験官は「だまって」いるので、語りは一気に進んで、「とんびの染屋」の話が語り終えられる後段と。それぞれに費された〈私〉の語りは、テクストで二・五ページ、四・五ページ、二ページと、中段がいちばん長い。それは、「解説」のいう「《私》の話の誘い出し方」「《私》と梟の心理的かけひき」が、そこにみられるためにほかならないが、この中段にも、「私も全くこいつは面白いと思ひました」・「私はこゝらで一つ野次ってやらうと思ひました」という〈私〉の心的動向を挿んで、三つの情況すなわち、(i)話を誘導しようとする〈私〉の在り様と、(ii)調子に乗って語る梟の在り様と、(iii)話をまぜ返してやろうとする〈私〉、ならびに戸惑って懸命に態勢の立て直しをはかる梟の在り様とが告げられている点も、見逃せない。ついでに〈発端〉と〈結末〉とを振り返ったとき、どちらにも登場人物のセリフと、その場の情景と、人物の行動とが語られていること、〈私〉の物語が三字の題名「林の底」のもとに在ることが、わたしの注意を促す。もっとも題名の〈三〉には、こだわり過ぎの感もなくはないのだが……。

ところで梟の〈私〉に聞かせようとする「とんびの染屋のこと」については、辞典[5]に「全国的に分布する梟紺屋（染物屋、東京ではなまってコウヤとも）の昔話を岩手県では鳶紺屋と言ったからである（それが「とんびの染屋」）」とあって、「林の底」で「名高い」話とされる所以が知られよう。そういえば、わたし自身子供のころに何かで読んだ記憶がある。物語の〈私〉も同様で、「そんなはなしをよく辻褄のあふやうに、ぼろを出さないやうに」語れるか、という以上、その内容を知っているに違いない。だからこそ、よしテストしてみようと思い立ったのである。そこで〈私〉は、鳥の「先祖」がどうであったかを言う梟の言葉を、ひとまず受け留めて、「ふん。鳥が天から降ってきたのかい。／そのときはみんな、足をちゞめて降って来たらうね。そしてみないちやうに白かったのかい」と、話にひかれた様子を示したうえで、「どうしてそんならいまのやうに、三毛だの赤だの煤けたのだの、斯ういろいろになったんだい」と、問いただす。これが、相手の弱点を知っていて、故意にそれを突く、意地悪な質問であることは、何食わぬ顔で〈私〉がはさんだ「三毛」の語をめぐる二人のやりとりによって、明らかになるはずだ。いや三毛が猫をさすことくらい、〈私〉の知らぬわけはない。にもかかわらず「三毛」と口にするところが、そもそも問題だろう。

はたして梟は、「私が三毛と云」うと、「俄かに機嫌を悪くし」て、三毛は猫のことで鳥にはないと反論してくるが、それこそ〈私〉の「思ふ壺」。それにつけ込んで、〈私〉は「そんなら鳥の中には猫が居なかったかね」、「どうも私は鳥の中に、猫がはひってゐるやうに聴いたよ。たしか夜鷹もさう云ったし、烏も云ってゐたやうだよ」・「とにかくほんたうにさうだらうかね。それとも君の友達の、夜鷹がうそを云ったらうか」と、相手を攻め立て、窮地に追い込んでいき、やりきれなくなった梟が、「やっと一言、／「そいつはあだ名でさ」」と苦しげに呟いたとき、「おや、あだ名かい。誰の、誰の、え、おい。猫ってのは誰のあだ名だい」と、容赦なく追求して、ついに「わたしのでさ」と「白状」させてしまう。〈心理戦争〉の前哨戦ともいうべき前段で、どうして〈私〉はそれほどまでに相手を追いつめるのか。それは、梟が得意になって語りださないうちに、機先を制して、自分を博学なえらいものと思い込んでいるらしい相手の〈自信〉を崩しておこうとする思わくに駆られたために、違いない。やはり梟など信用でき

ないと見なす人物がそこにいるわけだが、「泣き出しさうに」なったその顔をみると、さすがに「気の毒」だとの思いが兆し、自分のやり過ぎをかえりみて、「じっさい鳥はさまざまだねえ。／はじめは形や声だけはさまざまでも、はねのいろはみんな同じで白かったんだねえ。それがどうして今のやうに、みんな変ってしまったらう。尤も鷺や鵠は、今でもからだ中まっ白だけれど、それは変らなかったのだらうかねえ」と、「とんびの染屋のこと」を語り聞かせようとする相手に、〈私〉が水を向け、それで梟も機嫌をなおして語りの態勢を調えたところで、〈私〉の思わくに左右されがちな梟の姿勢が目立つ前段から、梟の語りはじめた物語が展開の軸となる中段へと、局面は移っていく。それゆえ、次に来るのは当然梟のセリフということになる。

まず〈私〉の誘い水に、「それはもう立派な訳がございます」と応じた梟の口にした「とんびの染屋」のやや長い一節にはじまる中段の、その(i)の情況はどうか。語りの進み具合はまだ〈一瀉千里〉というわけにはいかない。息継ぎの合間に〈私〉がすかさず口を挟んだり、「思はず笑って」梟にオヤと思わせたりするからだが、しかし、「いかにも、さうだね、ずゐぶん不便だね。でそれからどうなったの」・「うんさうだらう。さうなくちゃならないよ。僕らの方でもね、少し話はちがふけれども、語について似たやうなことがあるよ。で、どうなったらう」との〈私〉のセリフは、誰もが気づくように、語りを迎え促すものではあっても、まぜ返し混乱させる雑言ではない。「思はず」洩らした笑いにしても、「ところが早くも鳥類のこのもやうを見てとんびが染屋を出しました」との語りに接して、案の定と得心したためのひとり笑いであって、皮肉なそれを向けたわけではない。だから梟に気にされた「やう」だとみると、「急いでそのあとへ」次のセリフを「つけた」す――「とんびが染屋を出したかねえ。あいつはなるほど手が長くて染ものをつかんで壺に漬けるには持って来いだらう」。

ところが梟は、「さうです」とそれをすっきりと受け留め、「そしていったいとんびは大へん機敏なやつで勿論その染屋だって全くのそろばん勘定からはじめましたにちがひありません。いったい鳶は手が長いので鳥を染壺に入れるには大へん都合がようございました」と、「ずんずん話をつゞけ」て、〈私〉の笑いを意に介する風でない。となれば、〈私〉も安心して対応すればよさそうなのに、なおかつ、自分の〈失言〉(6)で相手がよく「怒り出さなかった」ものだ、と「ひやひやしました」という。前段の、次々と梟を問い詰めていった強気の〈私〉とは異なって、梟の態度に神経を尖らす〈私〉の、そこに見いだされるのが、興味深い。あるいは弱気になったともみられようが、そうであるのは、水を得た魚のごとくいきいきと語りを継いでいく梟の勢いに圧されて、これは敵わないとの劣等感が兆したためか、と思われる。

それにしても、はじめは、「(あゝ、あの楢の木の葉が光ってゆれた。たゞ一枚だけどうしてゆれたらう。)」と、「まるで別のこと」に気をとられながら梟に対応していた〈私〉が、次第にその巧みな語り口にひきつけられて、「それから」先を知りたいと思うようになっていくのは、事実なのであって、だからこそ(i)は終わりに、「それといふのもその晩は林の中に風がなくて淵のやうにひそまり西の空には古びた黄金の鎌がかかり楢の木や松の木やみなしんとして立ってゐてそれも睡ってゐないものはじっと話を聴いてるやう大へんに梟の機嫌がよかったからです。」との一節をおき、三日月の射し込む明るい〈林の底〉、すなわちしんと静まりかえった「林の中」に、そこに在るすべての〈耳目〉を集めて朗々たる語りの声を、響

かせるのである。ちなみに、いま引いた一節のカタチは、最後の句点を含めて一〇七字の長文なのに、あいだに読点を挟まず、ひと続きになっているところに、注意しておきたい。一節の伝える「その晩」の情景は、きわめて印象的なものとして〈私〉の裡にのこり、したがって語る際にもおのずから力がこもった在り様を、それは示しているだろう。細かいことだが、テクストでちょうど二ページにわたる(i)に、五か所に分かれて示される梟の語りは、それらを取り出して繋げれば、そのまま筋のとおった話となることをも、つけ加えておこう。(7)

(i)の終わりに響く声の告げる、染屋開店の知らせに湧き立つ鳥たちの様子は、「いや、もう鳥どものよろこびやうと云ったらございません。殊にも雀ややまがらやみそさざい、めじろ、ほゝじろ、ひたき、うぐひすなんといふ、いつまでたっても誰にも見まちがはれるてあひなどは、きゃっきゃっ叫んだり、手をつないだりしてはねまはり、さっそくとんびの染屋へ出掛けて行きました」と語られて、たしかに面白そうである。というよりも、まず〈私〉自身が「全くこいつは面白い」と聴いて、思わず「いや、さうですか。なるほど。さうかねえ。鳥はみんな染めて貰ひに行ったかねえ」と、感じ入った言葉を洩らすと、梟も「えゝ、行きましたとも」とそれを受けて、得たりや応とばかりに、「鷲や駝鳥など大きな方も、みんなのしのし出掛け」た次第を、「『わしはね、ごくあっさりとやって貰ひたいぢゃ』とか、／『とにかくね、あんまり悪どい色でなく、まあせいぜい鼠いろぐらゐで、ごく手ぎはよくやって呉れ』とか」と、注文主の声いろを交じえて語り、ついで大忙しのとんびがどのようにして鳥たちを染めたか、難しいのはどの点か――を、こと細かに語っていく。その情況を伝える(ii)の大半は、それゆえ梟の語りで占められている。(8)

そのようにして、順調に動くかと見えた物語は、しかしそのまま終わりまで流れてはいかない。梟が染壺につけられた鳥たちの様子を「それでも小さい鳥は、肺もちひさく、永くこらへて居れませんでしたから、あわてて死にさうな声を出して顔をあげたもんだと申します。こんなのはもちろん顔が染まりません。たとへばめじろは眼のまはりが染まらず、頬じろは両方の頬が染まって居りません」とまで、語りを進めたところに、いま一度波瀾が待ち受けていて、読者をはらはらさせるのである。波瀾とは、(iii)の伝える、〈私〉の仕掛けた〈心理戦争〉の本格的な闘い、梟とのあいだの精妙な「心理的かけひき」がそれで、そのひと幕の在るがゆえに、「林の底」は、ひと味もふた味も、物語の風味を増すのである。(ii)の終わりの梟の語りが、何事もなく、「ところがとんびはだんだんいゝ気になりました」とはじまる後段の語りへ続いて行って、「とんびの染屋」の話はすんなりと終わりを迎えてしまうのであれば、語り手にとってそれは倖せなことかも知れないが、読者の方は「林の底」に、コクのないスープを飲まされたような物足りなさを覚えることになるはずだ。それでは、語る〈私〉も浮かばれまい。だが、実際のはこびはそうはならないところに、「林の底」の語られる意味があるといえよう。総じて、物語内の主なでき事がさしたる波瀾もなく終始してしまうのは、物語の文法に抵触する事態なのである。だからこそ梟の語りの順調は、障害に出会わなければならない。「とんびの染屋」の話の完成までには、高いハードルが用意されなければならない。それを見事に超えてこそ、語り手は聴従するものを前におくことができるのである。

3　〈私〉の野次と語り手と

事は、梟がめじろや頬じろの染まり具合に触れ、〈私〉が「こゝらで一つ野次ってやらう」と思ったところに、起こる。〈私が〉なぜそう思ったかは、よくわからない。大人しく耳を傾けているうちに、その自分を腑甲斐無いと感じて、おのれに発破をかける気になったものか、調子よく語る相手がいささか妬ましくなって、ひと泡ふかせてやろうと思い立ったものか。どうも〈私〉には、負けず嫌いの性分がひそむようなのだが、それはそれとして、もしもこのとき〈私〉が「野次ってやらう」と思わなかったら、どうなったか、であれば「林の底」は肝心のひと幕を欠いて、不完全な物語に終わったろう――そう観ると、「林の底」のはこびにおける〈私〉のその動きの重要さを、あらためて実感せざるをえない。最初に梟に「話しかけ」られてから、さまざまなカタチでの対応をとおして、「とんびの染屋」の話の〈抽き出し役〉を演じてきた〈私〉は、事ここに至って「林の底」の物語としての生成に、大きなひと役を買っている、と言っていい。とはいえ、それはもとより本人が識ってのことではない。識るのは誰かを問うならば、「林の底」の一部始終を〈私〉に語らせた人物、〈私〉にその役割を与えた作者宮澤賢治にほかならぬ、ということになるだろう。

〈私〉の呈した〈野次〉は、「ほう、さうだらうか。さうだらうかねえ。私はめじろや頬じろは、自分からたのんであの白いとこは染めなかったのだらうと思ふよ」というもの。予期せぬ疑問と異見との提示に話の腰を折られて、「少しあわて」た梟が、「うしろの林の奥」を振り返ったのは、〈私〉から眼を転じて〈物語ること〉から〈答弁を探すこと〉へと、意識のモードを切り換えるためであったに違いない。自己調整を計った梟の、「いいえ、そいつはお考へちがひです。たしかに肺の小さなためです」と返す言葉に、しかし〈私〉は「こゝだと」思った、という。何がいったい「こゝだ」なのか。相手の答弁に、その優位を突き崩す突破口を見いだしたためにほかならない。そこで〈私〉は、前段とおなじように追撃の構えをとって、「さうするとどうしてあんなにめじろも頬白も、きちんと両方おんなじ形で、おんなじ場所に白いかたが残ってゐるだらうね。あんまり工合がよすぎるよ。息がつゞかないでやめたもんなら、片っ方は眼のまはり、あとはひたひの上とかいふ工合に行きさうなもんだねえ」と、おのれの言葉の鋒先を向けてゆく。その論鋒を携えてたつ〈私〉という障害、高いハードルに、梟はいかに対応したか、うまくそれを越えられたか。〈私〉の語りはそうだと告げているわけだけれども、ではそこに行き着くなりゆきの仔細を、みてみよう。

またしても〈私〉の論鋒に気圧されて、物語る自信が揺らいだものか、青白い月光のもとに眼をとじた梟は、「しばらく」して眼をあけると、「多分両方べつべつに染めましたでせう」と言う。「それからやっと」ともあって、場面に沈黙の気配がやや長く続く。その間に梟は彼なりに想像力を働かせて、〈私〉の論鋒を撥ね返す言葉を、想いついたのだ、と思われる。とともに、「少し声を低くして」自分に噛みしめるように言われたそれは、梟が語り手としての自信をたて直すきっかけとなった、と思う。だから、〈私〉が「笑ひ」ながら「両方別々なら尚更をかしいぢゃないかねえ」と、追い討ちをかけても、動じることなく、「をかしいことはありません。肺の大さははじめもあとも同じですから、丁度同じころに息が切れるのです」と、きっちりと対応ができたのである。それには〈私〉も内心「うまく畜

生遁げたな」と舌打ちしながら、鋒を収めざるを得なくなるところが、面白い。ちなみに、先ほどわたしは梟の想像力に触れたけれども、民間に伝わる昔話の〈再話〉の試みとは、たんなるその繰り返しではなく、単純素朴で粗削りなもとの話を、誰もが興味深く聴けるような物語に語り直す作業であって、それを果たすためには、物語情況の細部をこそ具体的に想い描くことのできる想像力の豊かさが、語り手に求められる――ということを、ここに確認しておきたい。その意味で、「とんびの染屋」のこれまでの語りは、〈再話〉者の資格が梟に備わっていることを、示していよう。

その梟は、〈私〉が「ふん、さうだらう」と言って鋒を収めたところで、「こんな工合で」と話の続きを「云ひかけてぴたっとやめ」た、という。〈私〉はそれを、自分に「いまやられたのが、しゃくにさはって」口を噤んだのだと解するのだが、果たしてそうなのだろうか。そこに疑問を抱くわたしとしては、もう一度前段の情況、鳥のなかの「猫」をめぐる応酬の在り様を、振り返ることが必要になる。容赦ない〈私〉の〈からかい〉に追い詰められた梟が、「たうとう泣きだしさうに」なったとき、〈私〉もやり過ぎたと思って態度をあらため、話を迎えるようにした――という在り様。顧みるとわたしには、それが梟にも鮮かな印象をのこして、どうしたらうるさい受け手をおとなしい聴き手にさせられるか――そのための有効な手だてを会得させたに違いない、と思われる。それゆえこのときも、鋒を収めながらなお不満そうな〈私〉の様子に気づいた梟は、語りの口火を切りながら、すぐに言葉を切ってしまうことで、〈私〉に「やられた」ために傷つき、心を乱したと見せて、〈私〉の同情を引きだす〈作戦〉に出たのだ、と思う。「云ひかけてぴたっとやめました」と告げられるところに、その動きの意図的なパフォーマンスにほかならぬことが、透けてみえるのではないか。

〈作戦〉は図に当って、〈私〉が「とんびの染屋」の従順な聴き手となった次第は、次のとおり――「すると今度は又私が、梟にすまないやうな気になりました。そこで言ひました。／「そんな工合でだんだんやって行ったんだねえ。そして鶴だの鷺だのは、結局染めなかったんだねえ。」／「いいえ。鶴のはちゃんと注文で、自分の好みの注文で、しっぽのはじだけぽっちょり黒く染めて呉れと云ふのです。そしてその通り染めました。」／梟はにやにや笑ひました。私は、さっきひとの云ったことを、うまく使ひやがったなとは思ひましたが、元来それは梟をよろこばせようと思って云ったことですから、私もだまってうなづきました」。傍点の梟の在り様が読者の注意をひかずにはおくまい。それはおよそ、傷つき揺れ動く心の持ち主にとれる態度ではないからだ。「にやにや」笑いは、わるいことをしたと感じて、相手をたてる発言をする〈私〉に対して、梟の抱いたし、やったりの思いに結びつく。

こうして、「心理的かけひき」に富んだ波瀾のひと幕が、「私もだまってうなづ」くとともに終わりを告げたあとは、「ところがとんびはだんだんいゝ気になりました。」と語り継がれ、「そして鷺とはくてうは、染めないまゝで残りました」と語り終えられるまで、〈林の底〉には、力を込めた語り手の声が今度は途切れることなく、響く。その「林の底」の後段に、読者は、〈私〉と「睡ってゐない」楢や松の木々たちと、そして空の三日月といっしょに、梟の語りに聴き入ればよい。どうなるかとはらはらし続けたあとだけに、ほっとして物語のなりゆきに、それからどうなったかに想いを向けることができるはずだ。梟が集中的に語ったのは「とんびの染屋」の後半、自分の仕事が評判となって次第に思い上がったとんび、「自

分は青と黄いろで、とても立派な縞に染めて大威張りで」いながら、ほかの鳥たちの注文にはきっちり応ぜず、「大ざっぱ」にしかやらなくなった主人公に、いかなる運命が待ち構えていたか——を明かす、物語の核となるくだりであって、聞く方も耳を澄まさずにはいられないところなのだ。

具体的には、白いままで最後までのこった「烏と鷺とはくてうとこの三疋」のうち、烏と「染屋」のとんびとのあいだに生じたいきさつに触れる梟の語りは、いかにも冴えて、迫真性をもつ。双方の試みる「心理的かけひき」が的確に語られている点も、梟と〈私〉とのそれを識る聴き手には、そして読者にとっても、興味深い。ただその結果は、梟と〈私〉の場合とは違って、おだやかには済まない。とんびは烏をどう扱ったか、そのために「染屋」の身に何が起きたか——を告げる語り手の声に、わたしも耳を傾けることにしよう。「『さあいゝか。眼をつぶって。』とんびはしっかり烏をくはへて、墨壺の中にざぶんと入れました。からだ一ぱい入れました。烏はこれでは紫のぶちができないと思ってばたばたばたばたしましたがとんびは決してはなしませんでした。そこで烏は泣きました。泣いてわめいてやっとのことで壺からあがりはしましたがもうそのときはまっ黒です。烏は怒ってまっくろのまま染物小屋をとび出して、仲間の烏のところをかけまはり、とんびのひどいことを云ひつけました。ところがそのころは烏も大ていはとんびをしゃくにさはってましたから、みな一ぺんにやって来て、今度はとんびを墨つぼに漬けました。鳶はあんまり永くつけられたのでたうとう気絶をしたのです。烏どもは気絶のとんびを墨のつぼから引きあげて、どっと笑ってそれから染物屋の看板をくしゃくしゃに砕いて引き揚げました。／とんびはあとでやっとのことで、息はふき返しましたが、もうからだ中まっ黒でした。」

引用がいささか長きにわたったけれども、物語掉尾の大事なでき事を、梟は力をこめてしっかりと語ったことが、実感できよう。さらにひと言、先にも引いた「そして鷺とはくてうは、染めないまゝで残りました」をつけ加えて閉じられた「とんびの染屋」の話は、つまりは染屋の増長慢のために被害をこうむった烏たちの、とんびに対する復讐譚ということになるが、もとの説話はそこに教訓ないし諷刺の意をこめた寓話であったのかもしれない。しかし〈林の底〉の梟は、その意味でこの話をとり上げたのではあるまい。〈私〉がひとつためしてみようと考えたとおり、自分が、「名高い」説話を「よく辻褄のあふやうに、ぼろを出さないやうにうまく云へる」、すぐれた語り部であることを、示したかったのだ、と思う。あるいは、〈私〉のためしを待つまでもなく、〈私〉を相手に自分で自分の力量を問うてみたのだとも、解されるが、いずれにせよ、「話してしまって、しんと向ふのお月さまをふり向きました」とある梟の姿は、大事な仕事を成しとげたという達成感を、これでいいのだとみずからに言いきかす充足感を、漂わせているだろう。「林の底」の冒頭で〈私〉に話しかけた梟は、自身の物語のすべて語り終えたいま、もはや〈私〉など眼中にないかのごとくである。したがって〈私〉は、「さうかねえ、それでよくわかったよ。さうしてみると、おまへなんかはまあ割合に早く染めて貰ってよかったねえ、なかなか細く染まってゐるし」との挨拶の言葉をひとり呟きながら、「もう立ちあがり」、そそくさと帰路につくほかはなかったのである。

4　「黄金の鎌」と「お月さま」と「月光」と

梟と〈私〉のやりとりのなかから、一篇の物語がどのように紡ぎ出され

たかを観てきたのだが、そのプロセスのあいだにいく度か言及される「西のそら」の「黄金の鎌」、すでに示唆したとおり、〈林の底〉の情況の推移にかかわりをもつ三日月ないし月光についても、眼を配っておく必要があるだろう。

まずひとつ気になることに触れておく。三日月が「黄金の鎌」と語られるのは、「林の底」のはじめとなかほどの二か所だったわけだが、そのイメジは〈林の底〉に射し込む月光の、鉛や水銀のように重く青い感触とはくい違う――というのが、それである。とはいえ、「黄金の鎌」の登場する〈私〉の語りを見直すと、どちらも〈私〉と梟の出会った「その晩」の情景、〈林の底〉全体のたたずまいを、そとから眺めて語っている個所にほかならないことに、あらためて気づく。その視点は、語りのなかの〈私〉、〈林の底〉で梟にあい対した〈私〉のものではあり得ない。物語る〈私〉、「その晩」のでき事のすべてをかえりみている語り手の〈私〉のそれであって、だから三日月に「黄金の鎌」のイメジをみるのも、語られる〈私〉ではなく、物語る〈私〉なのだ。どうしてそうであるのか、との問いに答えるのは容易ではないけれども、「鎌」は刈りとる道具で〈収穫〉の営みに結びつくことを考えると、物語るいまの〈私〉の裡に、「その晩」の三日月が、〈林の底〉に稔った物語を、梟のそれも〈私〉自身のそれもあわせて刈り入れ、「林の底」と名づけた倉に収める「黄金の鎌」として想い描かれているだろう――との解釈が浮かぶのだが、どうか。

さらには、「林の底」冒頭の、梟の物語りだした声に、「「黄金の鎌」が西の空にかかって」とひき続く〈私〉の語りのはこびを意識すると、「黄金の鎌」の輝きに触発されて、梟の語り行為は成り立つと〈私〉はみているのではないか――との想いが兆す。なかほどの一節にしても、梟の裡に芽生えた物語の順調な育成を促すものとして、〈私〉は「古びた黄金の鎌」に言及しているのではなかろうか。はじめにはなかった傍点の語が加わるのは、〈私〉が「黄金の鎌」の性格に触れたためであろう。「古びた」には、老耄というマイナスのイメジではなく、永く世のさまざまな事象をみつめ、多くの智慧をたくわえた〈老賢者〉の面影が、かさね合わされていることを、想う。

あるいは「黄金の鎌」とはひとつの喩にすぎないと、人は言うかもしれない。お前は意識過剰だと批判するかもしれない。しかしそれならそれで、〈私〉はなぜ単純に三日月といわず、喩を用いたか――が、やはり問うべき課題としてわたしにのこる。のこる以上は、それを我なりに解く試みを止めるわけにはいかないのである。

言い訳はさておいて、では月にかかわる「その晩」の情況をたずねよう。さし当たって、観るべき個所をもう一度掲げておくことにする――

(1) 信用していないという梟から語り掛けられた〈私〉がどう動いたかを告げる条りのはじめの「しかし又そんな用のない晩に、銀いろの月光を吸ひながら」という語りと・(2) 鳥のなかの「猫」のことについて〈私〉に問い詰められた梟の在り様を伝える、「梟はもう足を一寸枝からはづして、あげてお月さまにすかして見たり、大へんこまったやうでしたが、おしまひ仕方なしにあらん限り変な顔をしながら」、「猫」は自分の「あだ名」であることを「白状」した、とある一節と・(3)〈私〉の野次に語りの流れを紊され、態勢を立て直そうとする梟の様子に触れて、「梟はしばらく眼をつむりました。月光は鉛のやうに重くまた青かったのです。それからやっと眼をあいて、少し声を低くして云ひました」と、〈私〉の語るところと・(4)「梟は話してしまって、しんと向ふのお月さまをふり向きま

した」と、「再話」を果たした語り手の姿勢を示す個所と・（5）「その水銀いろの重い月光と、黒い木立のかげの中を、ふくろふとわかれて帰りました」という、「林の底」の幕引きの語りと。

こうして列挙してみると、興味深いことに気づく。「林の底」を語る〈私〉の口にした「黄金の鎌」の所在が、（1）と（3）と（5）で、「銀いろ」の・「鉛のやう」な・「水銀いろ」の「月光」によって告げられていること、だから「その晩」の三日月は、喩を用いるなら〈銀の鎌〉の方がふさわしかったろうに……と思えてならない。さらに（2）と（4）、月が梟とのかかわりにおいて言及される個所では、「お月さま」と呼ばれていること。奇数の場合と偶数のそれと――明らかに〈私〉は「その晩」の三日月をふた通りに語り分けている、とみていいだろう。すると「月光」の方は、（5）ではっきりとわかるように、〈私〉に注ぐ光として意識されていることが、確かめられよう。実は（1）を読むと、その個所だけでは、「そんな用のない晩に、銀いろの月光を吸ひながら」は、〈私〉のこととも梟のこととともとれて、判断に苦しむのだが、こうしてすべてを注意してみると、〈私〉が「銀いろの月光を吸ひながら」梟の話を「ゆっくり聴いてみる」という文脈であると、理解できる。明るい「月光」に誘われてぶらっと家を出たとみられる〈私〉ゆえ、「その晩」は、用事はなかったに違いない。それに対して梟は、「とんびの染屋」の「再話」をするという、大きな「用事」を抱えていたわけだ。梟が神経を緊張させていたことは、語りかけられた〈私〉の動きに接したその在り様、「梟ははじめ私が返事をしだしたとき、こいつはうまく思ふ壺にはまったぞといふやうに、眼をすばやくぱちっとしましたが、私が三毛と云ひましたら、俄かに機嫌を悪くしました」に、窺えよう。語りは、相手の一語一語に敏感に反応して、冷静ではいられない様子を伝えている。

その梟が、（2）で、〈私〉にやりこめられて困惑したあげく、心を向ける相手は月――であるのが、おもしろい。じっとしていられずに枝からはなした片足を、「あげてお月さまにすかして見た」とあるが、それは、あたかも〈どうしたらいいのでしょう、扶けて下さい〉というサインを送っているか、と見える。いや実際そうであったのだろう。その気配を察したからこそ、〈私〉は、自身に「銀いろの月光」を注ぐものを「お月さま」と言ったのではなかったか。そのあと〈私〉が野次をとばす場面でも、梟は「少しあわて」るけれど、そこでは「うしろの林の奥の、くらいところをすかして見」るだけで、月の方はみていない。物語るものとしての自信が根底から揺らいではいないためだろう。さらに問い詰められて「しばらく」黙したところに「月光」に触れる一行があっても、すでに確認したとおり、それは〈私〉の感じたことであって、梟にはかかわらないのである。いま一度梟が「ふり向」いて「お月さま」を仰ぐ（4）の情況については、すでに触れたので、つけ加えることはさしてない。あるとすれば、それは次のことだろう。自分のつとめを果たした梟が、「しんと」口を閉ざして、〈私〉ではなく「お月さま」の方を視たとき、その視線は何を語り掛けたのか。言葉にならない以上、想像するしかないわけだが、すべてをきっちりと語り終えた梟の味わう達成感と充足感とを想えば、そこには、《お蔭様で、無事に〈再話〉することができました。ありがとうございます》という感謝の念が托されていたに違いない、と思われる。

「梟は話してしまって、しんと向ふのお月さまをふり向きました」の一行は、さり気ない語りのようでいて、実はそうでない。「林の底」のすじみち、その曲折をしっかりと受け留めて、物語を締め括る一行として、少

なからぬ意味をもつ、とわたしは読む。「林の底」の到達点といってもいいのだが、梟が〈私〉に「話しかけ」たところにはじまる物語が、さまざまに動いたあげく、梟の「お月さま」への無言の挨拶にいたって終わるというなりゆきは、〈林の底〉の二人には予測のつかぬことであったろう。それを識るものこそほかならぬ「黄金の鎌」、いや物語のはじまる前から〈林の底〉の情況を見守り、「銀いろ」の光を投げかけている、当夜の〈銀の鎌〉であったに違いない。

そのように、語りの表てに際立たなくても、「林の底」に重要な役割を果たす三日月の存在を、〈私〉が意識するのは、すでにみたとおり物語のはじまりとなかほどと、「とんびの染屋」の語りが終わったあとに〈私〉がひとり帰路につく終わりの終わりともいうべきところの三個所であって、そのこと自体月の〈私〉とのかかわりがかりそめのものでないことを物語っていよう。とともに、「お月さま」の方を向いた梟とは異なって、〈私〉の場合かかわりは、いずれも「月光」において示されるゆえ、自身は月を見ず、月から見守られている、という受動のかたちをとっているのに、気づく。文脈のうえでは〈私〉が主格にたつ、はじまりの「銀いろの月光を吸ひながら」にしても、実情は月に照らされた自分の在り様を語っているのであって、受身の立場に在ることにかわりはない。月の差しだす「銀いろ」の光をわが身にとり入れ、落ち着いて梟に対応しようと、〈私〉は考えたのであろう。それゆえ、〈銀の鎌〉の三日月は、「その晩」の〈私〉にとっても、〈重い〉存在だったのである。そうであるとの実感が〈私〉自身にもあったことは、他の二個所の語りによって明らかだ。

なかほどの語りで、梟が「眼をつむり」、「やっと眼をあいて」ものをいうまでの「しばらく」のあいだに、「月光は鉛のやうに重くまた青かったのです」と、〈私〉はいう。そこで〈私〉は、身にふり注ぐ青白い「月光」をとおして、《意地を張るのも好い加減にしなさい。後悔するぞ》と戒める三日月のまなざしを、感じたのだと思われる。にもかかわらず、なおからかいを止めなかったために、梟に巧みに切り返され、返っておのれのやりすぎを悔む仕儀にたち至ったのであった。以後、黙して語りに聴き入りながら、〈私〉はあらためて「月光」の〈重さ〉を噛み締めたに違いない。そして終わりの終わりに、梟と別れて〈林の底〉を立ち去ろうとしたとき、ふたたび「水銀いろの重い月光」を背に感じた、という。水銀も鉛とおなじく比重の重い金属であるわけだが、そこで「月光」がそのように「重い」のは、どうしてだろう？　それはおそらく、この青味を帯びた白光が、三日月の次のメッセージを〈私〉に伝えているからであろう――《お前は孤立感におそわれている様子だが、心配しなくともいい。この私が今夜のお前の在り様の一部始終、梟への対応のマイナスの面だけでなくプラスの面もすべて見届けている。今後も見棄てたりはしないから》と。〈私〉が自身の体験を誰に向けて語ったのか――は、わからない。としても三日月は空の何処かに在って、〈私〉の物語を確かに聴いたはずである。その証據が、いま読者の前に在る「林の底」そのものなのだ。

おわりに

補足をひとつ、「とんびの染屋」のはじめに、鳥たちが一様に白かったころの困った情況を語る一節、みなが「実際感情を害することもあれば、用事がひどくこんがらかって、おしまひはいくら禿鷲（はげわし）コルドンさまのご裁判でも、解けないやうになるのだったと申します」があって、そこに鳥た

ちの〈王〉とおぼしき存在の名が出てくるので、注記しておく。「禿鷲」は「タカ目タカ科」に属し、翼をひろげると、「1.5～2.7m」に達するという大型の鳥で、悠揚と空を飛ぶ姿が印象的なので、鳥類の〈王〉と目されたものと思われる。その名前が「コルドン」とされるのには、近い種類の鳥で、空を飛ぶ鳥のなかで最大の〈コンドル〉とのかかわりが、推察されている――「コルドンは賢治の考えた固有名詞と思われるが、あるいはワシタカ科と類縁の南米産コンドル科の大猛禽コンドル（condor）をもじって付けた名かもしれない」。飛翔するコンドルのイメジには確かに〈王者〉の風格が認められるゆえ、「あるいは」以下の推察は実際に有り得ることだと、わたしも思う。

「林の底」の物語で、はこびのなかには〈林の底〉という語のみられないのは何故か――を問うことからはじめた、わたしの読み解きの作業は、地上の梟と〈私〉とのあいだのやりとりを短い底辺とし、天空の三日月を頂点とする細長い二等辺三角形の関係図を、物語の裡に確認したところで終わる。その意味で「林の底」とは、わたしにとっては〝月と、そして梟ならびに〈私〉との物語〟とも呼ぶことのできる一篇にほかならない。

〔注〕

（1）本論における「林の底」のテクストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集6』（一九八六・五　第一刷）所収のそれを使用した。引用中の傍点はすべて筆者の付したものである。

（2）句読点と括弧を含め、字数にして一一七字と一二三字。

（3）「雁の童子」……その二人の語り手」（『宮澤賢治の〈ファンタジー空間〉を歩く』双文社出版、二〇〇五・七）所収。

（4）注（1）の全集本の「解説」。

（5）原子朗著『新　宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍、一九九九・七　第1版第1刷）の〈とんび〉の項。

（6）「あっ、私が染ものといったのは鳥のからだだった、あぶないことを云ったもんだ」と〈私〉は気がつくのだが、「あぶない」は、相手もその一員である生きた鳥たちを、布切にひとしい物体として扱ったことを指すのだろうか。

（7）鳶が染屋を開業するまでのいきさつを告げる語りは、繋げると行数で二十一行、二ページ三十六行にわたる（i）の過半を占めている。

（8）（ii）の十九行のうち、最初の「私も全くこいつは面白いと思ひました。／「いや、さうですか。なるほど。さうかねえ。鳥はみんな染めて貰ひに行ったかねえ。」」以外は、すべて梟の語り。

（9）『大百科事典11』（平凡社、一九八五・六初版）の〈ハゲワシ　禿鷲〉の項（竹下信雄執筆）を参照した。

（10）注（5）の辞典の〈禿鷲コルドン〉の項。

（えんどう　たすく　元本学教授）